

研修 ファイル

友定啓子氏講演「子どもと生きる私たち」を聞いて — お茶の水女子大学ホームカミングデイ2018基調講演から —

浜口順子

(大学教員)

お茶の水女子大学には「ホームカミングデイ」という卒業生が集う行事があり、2018年5月26日の会では「お茶の水女子大学と子ども学」と題したイベントが催された。このテーマは、2018年4月に同大学の文教学部人間社会科学科に「子ども学コース」が開設されたことを受けて、その前身にあたる家政学部児童学科（1949年設置、1992年廃止。倉橋惣二の発案により設置され、その後、本誌編集主幹も務めた津守真や本田和子らが教鞭をとった）の教育を振り返り、あらためて「子ども学」という学問について

考えようと企画されたものである。基調講演者は、その児童学科でかつて学んだ山口大学名誉教授の友定啓子氏である。以下、氏の講演を部分的に紹介しながら、概要をお伝えすることとする（太字文は、友定氏のパワーポイント資料を基に筆者が若干修正したもの）。

「子どもは面白い」

（児童学科で学んだ）最も大きな財産はなんといっても、「子どもは面白い！」と確信できたことでした。基本的に子どもは好きですが、それが「面白い」に変わったことは重要でした。（略）

浜口順子（はまぐち じゅんこ）
お茶の水女子大学教授。

この「子どもは面白い」の中身は簡単にいうと、

1 「自分の中に子どもがいる」 わからないと

きはそれに聞きなさいということ。

2 「子どもは教育される前に自ら生きる存在」

人としての尊厳があるということ。

3 「子どもは独自の文化をもつ」 私たち大人

とは異質な感覚をもち、独自の文化をもつ

ということ、それとの通路を見つけよう

ということ。

子どもを「かわいい」とか「好き」と思う

より「面白い」と感じると、大人と子どもは

自然に対等につきあえると私も常々考え、授

業などで学生に伝えてきた。氏も「それさえ

あれば、学生たちが後々現場で窮地に陥って

も、子どもたちへの信頼を捨てずにやってい

けると思った」と言われていたので、我が意

を得た思いだった。

「子どもを理解する」

子どもを理解するには、大きく三つの方法があると思っています。

1 科学的な理解…児童学はここから始まりま

した。いつも何かしら問題があり、それへ

の解決に向けて、膨大な科学的知識や技術

が生み出され積み上げられてきました。

2 体験的理解…実際に子どもに直接触れてわ

かるという方法です。これは個人の経験を

基にするので、主観的といわれて、科学の

対象にならないと、追いやられてきました。

3 「子どもとは何か」と、子どもの存在その

ものの意味を問い、社会や自分の人生に意

味つけていくという理解…歴史的アプロー

チや文化論的なアプローチ、社会学、文化

人類学、言語学からのアプローチもありま

す。

筆者は友定氏の児童学科の後輩になるが、やはりこの三つの子ども理解の方法を大学で学び、特に「体験的理解」の重要性については、津守真先生から深く刻み込まれた。いくら理論や学問で子どもについて学んでも、実際の子どもを近くで実際にかかわって感じないと本当にはわからない、と。

津守先生は、実際に子どもと触れる体験というものを重要視していました。お茶大の教員でありながら、附属幼稚園・愛育養護学校・家庭保育と三つの保育の場をもち、四足のわらじを履いておられました。その経験と学術的見地から、生の子どもの息遣いと応答する保育の場でこそ、子ども学が生まれると主張されました。

津守先生、本田先生の著書から考える

友定氏は、津守真著『保育の体験と思索』（大日本図書 1980年）から、ある子ども「命令する」という行動をその子の内面

の表現として捉える例を挙げ、それを一般化せずに、時を重ねながらその時その時の応答をする保育実践者の理解の仕方について論じる。

何しろ、その場で応答しなければなりませんから、事前にもっている知識や技術だけでは間に合いません。動きながら、頭と心をクルクルと回転させて、瞬時に理解しつつ応答しています。個人的だから、主観的で価値がないと言ってしまうえば、保育は成り立ちません。主観的だからこそわかることです。これは、保育者自身にとっても意味のある体験だと思えます。子どもに人間的に応答しながら、保育者も自分をつくっていきます。

続けて氏は、第三の方法による子どもの理解を著した嚆矢の書として、本田和子著『子どもたちのいる宇宙』（三省堂 1980年）から、「めぐる」というテーマを扱った部分を

取り上げる。「スピン」と言っでは自らの体をぐるぐる回す子どもの姿、文字通り駆け回る子ども、独楽や風車という遊具、渦巻きを描く子どもなど、さまざまに「めぐる」の意味を多面的に掘り下げて、子どもという存在に迫る。

本田先生は、このようにして、子どもの示す行為や身振りの中に、子ども独自の感性と、同時に人間の原型をすくい上げます。子どもとは、人間とはどういう生き物なのかという問い方です。子どもは、未熟で大人に守られ、教育されるだけの存在ではない、異質な感覚をもち、小宇宙の管理者なのです。ともすれば、子どもをどう教育するかというまなざしで見えない、大人への放たれた一本の矢です。

子ども学の意味

氏は最後に「子ども学」が現代を切り拓く

可能性について次のように語った。

最近気づいたことがあります。子どものことを考えるとすることは、次世代や、自分と異なる他者を理解し支えるということですが、一方でそれが、自分へのまなざしにつながるということです。高齢社会といわれ、多くの高齢者やその周りの人が、いかに生きるか、いかに死ぬかということに直面しています。私もその一人です。仕事をしている間は感じませんでした。自分の中に抜きがたく、子ども時代の体験が住みついていることを感じるようになりました。善きにつけあしきにつけ、それとの対話で自分の日々の生活が支えられていると感じます。(略) そうすると、眼前にいる子どもを支えることは、その子の遠い未来を支えることにつながるのではないかと思います。子ども学は、一過性のものではない、一生ものだと思います。